

平成30年度 第2回屋久島世界遺産地域科学委員会
ヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議
議事概要

日 時：平成31年2月26日(火) 14:00～17:00
場 所：鹿児島県市町村自治会館

議事(1) ヤクシカの生息状況等について

- ・ヤクシカによる農作物被害については減少傾向にあるが、シカに寄生するヒルやダニが果樹園にも発生するなどの影響が出ている。果樹の被害については、サルによる果実の食害が多いが、シカによる樹皮剥ぎ被害も見られる。
- ・糞塊密度分布推定図については、平均糞塊密度に合わせた階級区分が必要。捕獲がほとんど行われていない中央部で個体数減少が示唆されているが、低標高の捕獲の影響等、その理由の解明が課題である。
- ・捕獲頭数そのままでなく、何か単位を決めて指標にして傾向を示した方がよい。
- ・捕獲が低標高地帯に集中しているのに中央部の河川界区分3で減少した理由は何故なのか今後の課題として調査を進めるとよい。
- ・推定生息密度が糞粒法では増加傾向にあり、糞塊法では減少傾向にある場所が多いという結果の違いについて、糞粒法では年度のバラツキが出やすいという特徴があるため、その影響も考えられる。
- ・糞塊法では広範囲を把握できるというが、調査箇所は稜線部中心に設置されており、一方、糞粒法では谷部や尾根部など地形的には様々な場所で行っている。
- ・糞粒法でも糞塊法でも一貫した方法で長期的に見るのが重要である。糞粒法による経年的な個体数推定結果と経年的な捕獲状況も併せて見比べ、その捕獲数で本当に増えるのか減るのかを考えるとよい。本結果を見ると楽観できない状況にある。
- ・現場の感覚として、平地では減少していると実感しているが、高標高地については捕獲していないのでわからない。
- ・誘引する時にわなを同時に稼働させていると、警戒心を上げてしま可能性があり、誘引期間とわなの稼働期間は分けた方がよい。誘引狙撃では、そこはしっかり分けられている。
- ・河川界区分ごとの推定個体数の推移、捕獲頭数、生息密度分布図、捕獲効率(CPUE)を合わせて見ていくことにより傾向が読み取れるのではないかと。これにより本当に個体数が多いところに捕獲圧がかけられているか、どこに捕獲圧をかけるべきかを評価・検討できる。
- ・過度に植生が劣化した場合に本当に元の植生に戻り得るのがわかるよう、劣化の大きさを考慮した植生の再生に向けた調査をするとよい。

議事（２）平成 30 年度及び平成 31 年度の取組について

- ・ SS という体制で最終的にどういう状況を作りたいかというのをまず検討していく必要がある。富士山では、最終的にシカがいても防護柵をしなくて人工林が成林して、天然更新もうまくいくことを最終達成目標にしており、そこからバックキャストして 4 つの達成段階を示して進めている。
- ・ ヤクシカ管理計画の「スマートディアを発生させないことを念頭に、生息密度や捕獲実施場所に応じた捕獲方法を参考にする」との記述について、スマートディアを発生させないというのは無理だろう。状況の変化に対応して持続的に捕獲を実施することができるようになると考えるとよい。
- ・ 富士山ではこの 6 年間で密度指標が 1/5、場所によっては 1/10 に減った。また、くくりわな、忍び猟、待ち伏せ猟、誘引狙撃といった様々な手段を状況の変化に応じて組み合わせているため参考にして頂きたい。
- ・ 富士山では、シカの動きをしっかりと理解することが重要との話になっており、今後も GPS 首輪の調査を継続頂きたい。おそらく屋久島においても移動性のあるものと定住性のあるものと 2 タイプある。
- ・ 長年の課題であった奥岳地域のシカに GPS を装着して結果が得られたのは非常に大きい。
- ・ 今後、奥岳地域のシカの管理はますます重要になってくるため、このデータが役立っていくと思うが、個体により色々なタイプがあるため、できれば調査頭数が 2 桁くらいを目標に頑張ってもらいたい。
- ・ 44 日間で 2 頭の首輪装着という情報だけでなく、射程距離で撃てる状況にあるシカに何回遭遇し、何回撃って何頭獲れたというデータを提供頂き、捕獲の大変さを皆で共有し、評価していく必要がある。
- ・ 植生保護柵の説明の中で、柵が破損していたため効果がでなかったとの解釈があったが、元々シカの密度が少ないとの可能性はないか。
- ・ 過去に国割岳を見回った際、柵内に侵入されているものが多かった。
- ・ シカ柵については折角柵内外で違いが見られてきたデータも、侵入された後は違いがわからなくなってしまうため、メンテナンスをしっかりと行う必要がある。
- ・ 西部地域の密度操作実験については来年度再度検討していく。合意形成の面から川原から瀬切に実施場所を変更することを考えている。
- ・ 西部地域は、低地から高標高まで垂直分布がしっかりと残っている地域の一番低地の部分で重要な場所のため、シカに対して色々対策がとられるべきで、次年度の瀬切地域での取組は非常に重要と考える。
- ・ 川原地域は森林の回復、林床植生、森林生態系の回復という意味で広範囲にシカの防除柵をつける方法を考えたかどうか。
- ・ 猟友会員について 60 代が増えているのは、兼業農家でリタイアした後、自分の農地を守るため、狩猟免許を取り、会員になっていると考えられる。若い人の減少について狩猟

の登録・更新料が一時的な出費として厳しいことや、I ターンで移住したがその後屋久島を出て行く人がいることが考えられる。

- ・西部地域のカメラトラップの狙いがわかりづらい。林道沿いはシカ密度が高いことが明らかで標高 400m くらいのところでは撮影頻度が 1/3 位に落ちるため、注意してデータを使って頂きたい。また、設置箇所は国有林と民有林の境目になり、設置環境の解釈が難しいため、結果の活用に必要なである。

議事（3）森林生態系の管理目標について

- ・シダ植物の林床被度の指標案として 50%を目安とする数字を挙げるのはよいが、今後調査で被度を%で記録できるのか。ブラン・ブランケの方法のままで把握した方がいいのではないか。
- ・シダ植物はブラン・ブランケの被度クラスで 1 や+が多く、柵内が柵外の倍かどうかの比較は難しい。
- ・将来的には柵を外してある程度はシカが食べる状況にすることを踏まえ、柵がなくても次の年にある程度大きくなる、個体サイズ維持する程度の蓄えを作れる状況に持っていくというのが基本的な考えである。
- ・絶滅危惧種の保全の観点からは、これらが全て柵内に囲まれているという状態に持っていく必要があり、そのためには特に標高の高いところを主体にもう少し柵を増やす必要がある。
- ・嗜好性植物種について、シカの密度が低いところでは食べられていないため、嗜好性が特に高いわけではない。また、マテバシイは低標高帯にしか出現しないため、より高標高地にも出現するアカガシを入れた方がよい。
- ・ヤクシカが問題なのではなく、ヤクシカの個体数が過剰なことが問題であることがわかるように記載するとよい。
- ・第二種特定鳥獣（ヤクシカ）管理計画があるため、それに森林生態系管理目標がどう噛み合うのかももう少し詰めていくことが1つのポイントである。
- ・シカの捕獲場所ではない場所で管理目標の実施箇所が提案されているが、この目標案ができた後は、対策が必要な場所で捕獲を考えていく必要がある。
- ・今後のスケジュールについて、どのくらいの期間で目標達成を目指すのか。
- ・シカの個体数については期間目標を立てることができるが、植生回復は種により異なり、難しい部分も多いだろう。回復の兆しがあるものについては記述がほしい。
- ・愛子岳のふもとでは、柵外でマイナス成長していたヤブニッケイがヤクシカの捕獲圧がかかってからプラス成長している状況なので、そうしたデータを加え、管理の効果が計れることを記載した方がよい。
- ・楠川流域や一湊川流域はホットスポットなのでモニタリング場所として検討してほしい。
- ・西部地域は大きく半山、川原、瀬切に分かれる。密度操作実験計画の取組については川

原から瀬切への変更を考えているとの話だが、例えば半山は今のまま捕獲に関して手をつけず、川原では森林生態系、植生の回復のため更に広範囲に防除柵をつけるなどしたらどうか。

- ・防護柵については、大きい柵を 1 つ作るより小さい柵を複数群状に配置して植生回復を図る方が安全だろう。
- ・垂直分布の多様性については、既往データがある場所でないとできないが、嗜好性植物種の更新と絶滅危惧種については、どこでモニタリングしていくか整理が必要である。
- ・管理目標については①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度、②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値（OUV）である植生垂直分布の多様性、③ヤクシカの採食影響が見られる嗜好性植物種の更新、④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全、の 4 項目を基本とする。
- ・指標や実施場所については、今回提示された方向性で考え、後は順応的に実施段階で改善していくこととする。